

2025. 3. 2 (日) 使徒22:22~29

22:22 人々は彼の話をごここまで聞いていたが、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」

22:23 人々がわめき立て、上着を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので、

22:24 千人隊長は、パウロを兵営の中に引き入れるように命じ、なぜ人々がこのように彼に対して怒鳴っているのかを知るため、むちで打って取り調べるように言った。

22:25 彼らがむちで打とうとしてパウロの手足を広げたとき、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むちで打ってよいのですか。」

22:26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、「どうなさいますか。あの人はローマ市民です」と言った。

22:27 そこで、千人隊長はパウロのところに来て言った。「私に言いなさい。あなたはローマ市民なのか。」パウロは「そうです」と答えた。

22:28 すると千人隊長は言った。「私は多額の金でこの市民権を手に入れたのだ。」パウロは言った。「私は生まれながらの市民です。」

22:29 そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、すぐにパウロから身を引いた。千人隊長も、パウロがローマ市民であり、その彼を縛っていたことを知って恐れた。

<説教>

使徒パウロはエルサレムの神殿でユダヤ人たちによって捕らえられ、更にローマ軍の千人隊長に渡されました。「殺してしまえ」と叫ぶ人々に向かってパウロは千人隊長の許可を得て弁明を始めました。パウロはまず手振りて人々を静かにさせてからヘブル語で語りかけたので人々はますます静かになって彼の話、証しを聞くこととなりました。

パウロが証ししたことは次のようなことでした。まず自分がユダヤ人として律法について厳しい教育を受け、皆と同じく神に対して熱心だったこと。その熱心のゆえに、イエス・キリストを信じる者たちを死にまでも至らせるほど激しく迫害し、更に迫害のためにダマスコに向かったこと。しかしその途中でイエス・キリストと出会い、地に倒され、イエスの御声を聞き、イエスの指示を受けてダマスコでアナニアという人に会ったこと。そのアナニアを通して、自分は神に選ばれ、イエス・キリストの証人となるように定められていたのであり、それまでイエスがキリストであることを否定してクリスチャンたちを熱心に迫害して来たことが自分の罪だったことを知ったこと。更にエルサレムに帰ってから神殿で祈っていたときにイエスによって、急いでエルサレムを離れるように命じられ、異邦人のところに遣わされたこと。これらのことでした。

さて、そんなパウロの弁明(22:3-11)を静かに聞いていた人々でしたが、〈彼のご話をここまで聞いて〉再び〈声を張り上げて〉〈「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」〉と叫び始めました(22)。その騒ぎは〈わめき立て、上着を放り投げ、ちりを空中にまき散ら〉すほどに一層酷くなってしまう(23)。〈ちりを空中にまき散ら〉すというのは、拒絶とか呪いとか殺意とかそんなものを表したものと思われ(cf. IIサムエル 16:13)。ユダヤ人民衆はパウロの証しを聞いたけれども全く受け入れ

ず、頑固に拒絶したのです。何故かと言うと、パウロの証しが人々にとっては自分たちの罪を鋭く指摘するものだったからだと言えるでしょう。自分たちの律法を守り行うことの熱心、神への熱心、その熱心の故にナザレのイエスを神の約束のキリストだと信じないでいること、更にはそのイエスをキリストと信じる者（ここではパウロのことになっているわけですが）を捕らえ殺そうと迫害することが自分たちの罪であることが指摘されたからでした。更にパウロが異邦人のところに行き、彼らと交わり、イエスがキリストであると宣べ伝えているのは、イエスがキリストであるというパウロの証しを自分たちが受け入れない(18)という自分たちの罪の故だからと指摘されたからでした。こうしてここでユダヤ人民衆はパウロが証しし、宣べ伝えるイエス・キリストへの反対、拒絶を明確に示したのでした。あのナザレのイエスが自分たちの神の約束の救い主キリストであるとユダヤ人たちにだけでなく異邦人にまで言い広めているパウロがこの地上に生きていることが許せませんでした(22)。

パウロはヘブル語で人々に語り、人々もヘブル語で叫んでいるので千人隊長には〈なぜ人々がこのように彼に対して怒鳴っているのか〉が分からなかったのでしょうか。前もそうでしたが(21:34)、民衆に聞いても埒(らち)が明かないと考え、またパウロがよほど民衆を怒らせるようなことを言ったりしたりしたのかもしれないとにらんだのでしょうか。パウロの口から聞き出そうと〈パウロを兵営の中に引き入れるように命じ〉、パウロを〈むちで打って取り調べるように言った〉のです(24)。

しかしパウロは自分は〈ローマ市民〉である、つまりローマ市民権を持っていることを百人隊長に伝え、自分が受けようとしていることは不法、違法だと訴えました(25)。かつて第2回伝道旅行のとき、ピリピでもパウロは「長官たちは、ローマ市民である私たちを、有罪判決を受けていないのに公衆の前でむち打ち、牢に入れました」(16:37)と言って自分が違法な取り扱いを受けたことを抗議しました。ここでもパウロはすべての権力・権威の上におられる最高権力・権威であられる神、主イエス・キリストのしもべとしてローマの権力を恐れずに、言うべきことを言いました。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むちで打つことはローマの法にも反することであり、してはいけないことです」と。このパウロの訴えは百人隊長から千人隊長に伝えられ、千人隊長はパウロと再び話をしました(27-28)。確かに「近ごろ暴動を起こしたあのエジプト人」ではなく「タルソの町の市民」(21:38-39)だとは分かっていたようですが、それでも大勢のユダヤ人たちから「殺してしまえ。地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない」などと言われる人間なら、やっぱり実は乱暴者、むち打ちでもしなければ罪を白状しない悪人かもしれないと千人隊長は考えたのかもしれませんが。しかしパウロがタルソどころではない、ローマの〈生まれながらの市民〉で、ローマの法もちゃんと使っている人間だと分かり、千人隊長は驚いたのでしょう。

そうなると、そもそもよく取り調べもしないでパウロを〈捕らえ、日本の鎖で縛るように命じた〉(21:33)ことから始まって、更に〈むちで打って取り調べるように言った〉(24)自分の方が訴えられるかもしれない、と恐れたのでしょうか(29)。そうなると、「自分の地位や立場も悪くなり、多額の金で手に入れたローマ市民権を剥奪されてしまうかもしれない」などと千人隊長は恐れたのでしょうか。一方パウロはこのたびの大騒動の始めから何の恐れる様子もありませんでした。落ち着いて、おだやかで冷静でした。自分が正直に精一

杯語った証しが人々から全く受け入れられず、事態が全く良くなり、むしろもっと悪くなり、なお殺されそうになってるような危険の中で、なお誰をも恐れることなく、〈生まれながら〉神から与えられた権利を主張し、正しく用いたのです。

それもひとえに神、主イエス・キリスト、すなわち自分にいのちを与え、この地上に生まれさせ、育ててくださり、何よりもご自分への迫害者だった自分を見捨てず、ご自身を現してくださり、信仰を与えて救ってくださったお方、自分のいのちを握っておられるお方に対する揺るがない信頼、信仰の故でした。私たちも同じ神、主イエス・キリストに全く依り頼み、お任せし、人を恐れず神、主イエス・キリストだけを恐れて歩んで行きたいと願い、主イエス・キリストの御名によって祈ります。